2003・2・21 沖縄タイムス

寄稿

オニヒトデ駆除は長期展望で

大森　信

沖縄のさんご礁にまたオニヒトデが大発生している。昨年七月ごろから阿嘉島臨海研究所のある慶良間列島ではサンゴの被害が目立ちはじめ、既に70%ぐらいが食い尽くされた場所もある。

五年前の白化現象からようやく回復の兆しを見せはじめていたのに、今年の六月にはサンゴの産卵量が激減するかもしれない。

地元のダイビング業者やボランティアの人たちは駆除に立ち上がった。本県でも遅まきながらオニヒトデ対策会議を立ち上げ、対策に乗り出した。しかし、駆除事業は実施期間が限られていて、そのための予算はもう使い果たしたという。

県にはオニヒトデ担当の係もないし、専門家もいない。基地問題には真剣さを見せる人たちも海の中の問題については歯がゆいばかりである。

沖縄ではオニヒトデによるサンゴの食害が一九六九年以降しばしば大きな問題になり、そのたびに多くの人手と経費が投入された。

例えば七〇年からの十四年間に約六億円が使われ、およそ千三百万個体のオニヒトデを駆除している。しかし、ごく一部を除いて、琉球列島全域のさんご礁が荒廃したから、結果としてオニヒトデ対策は失敗に終わったといえよう。

その原因には、駆除のための予算づくりが遅れたことや、個体数あたりの買い上げ制を取り入れたため、とり上げが密集域に偏り、とり残しがたくさん出たことなどが指摘されている。

オニヒトデは生まれた幼生が着底して稚ヒトデに変態し、約六カ月の間、石灰藻を食べて直径約一㌢に成長する。サンゴを食べはじめるのはこのころからで、生後二年目には直径約二〇㌢に成長して産卵をはじめるが、本当の寿命はわかっていない。

南西諸島ではここ数年、常にどこかで高密度の集団が見つかっていて、大発生を助長する何らかの人為的要素、例えば船のバラスト水によって卵や幼生がばらまかれていることとか、海水の富栄養化によって幼生の餌が増えたことなどが、かかわっていることをうかがわせる。

オニヒトデを全部駆除するのは不可能だから、サンゴ幼生の供給源になっている慶良間列島のような場所の島沿いを分割して囲い、徹底的に駆除するほかない。オニヒトデはダイバーが手鉤（かぎ）で一つずつとり上げているが、昼間はサンゴの下に隠れているので見つけにくいし、狭いすき間から取り出そうとしてサンゴを壊してしまったり、体がちぎれたりしてしまったりする。

広くアイデアを募ってもっと効率のよいとり上げ方法を開発したいものだ。オニヒトデが多く見られる浅いさんご礁は普通の船では近寄りにくいから、船外機付きの大型ゴムボートがたくさん必要である。薬剤や生物資材による駆除についても、もっと検討されてよいように思われる。

問題は、駆除が単年度事業で地元の町村には経費がなく、結局はあなた任せの状況にあることだ。ダイビング業者や漁業協同組合にお願いしましょうではなく、駆除事業をオニヒトデからさんご礁を守るための県の重要課題と位置づけ、定期的なモニタリングを含めて長期の展望に立った戦略を打ち出す必要がある。

（阿嘉島臨海研究所所長）